

子規を怒らせた蕪村句集

―三森松江編『蕪村句文集』考―

復 本 一 郎

一 子規の怒り

まずは、子規の左の短い文章をご覧いただきたい。明治三十年（一八九七）十二月三十日付の「日本付録週報」に掲載されたエッセイ「墨のあまり」の一節である（以下、引用文には適宜、句読点、濁点、振り仮名を付した）。明倫社にて出版したる蕪村句文集には幹雄の圈点あり。彼は多く蕪村集の拙き側の句を取りて之を賞揚したる者、固より三文の価値を有せず。宜しく抹殺すべし。

*

ただし、この衝撃的な一文は、しばらく措くことにする。子規と蕪村とのかかわりの最初は、一般的には、明治二十六年（一八九三）とされている。子規自身も、明治三十二年（一八九九）十二月刊『俳人蕪村』（ほととぎす発行所）の「緒言」において左のごとく記している。

余等の俳句を学ぶや類題集中、蕪村の句の散在せるを見て、稍其非凡なるを認め、之を尊敬すること深し。ある時、小集の席上にて鳴雪氏いふ、蕪村集を

得來りし者には賞を与へんと。是れ固と一場の戲言なりとはいへども、此戲言は之を欲するの念切なるより出でし者にして、其裏面には強ちに戲言ならざる者ありき。果して此戲言は同氏をして蕪村句集を得せしめ、余等亦之を借り覽て大に発明する所ありたり。死馬の骨を五百金に買ひたる喩（筆者注・よりよい蕪村の俳書を得るため）も思ひ出されてをかりき。是れ実に数年前（明治二十六年か）の事なり。而して此談一たび世に伝はるや、俳人としての蕪村は、多少の名誉を以て迎へられ、余等亦蕪村派と目せらるゝに至れり。

「蕪村派」を自認する子規の矜持に満ちた一文である。子規たちは（「余等」とある）「類題集」によつて蕪村句の「非凡」を発見したという。子規たちが披見していた「類題集」とは、明治三十一年（一八九八）六月発行の「ほととぎす」第十八号に掲載されている子規の「或問」によれば、

類題の稍大部なるは、類題発句集、新類題発句集、

故人五百題、新題林笈句集（題林笈句集といふ書ありや否や知らず）、笈句題叢（名所の部共に八冊）等なり。

ということになる。ちなみに、『類題笈句集』は蝶夢編、安永三年（一七七四）刊、『新類題笈句集』も蝶夢編、寛政五年（一七九三）刊、『故人五百題』は鳥明編、天明七年（一七八七）刊、『新題林笈句集』は周芳史公編、享和元年（一八〇二）刊、子規末見の『題林笈句集』は車蓋編、寛政六年（一七九四）刊、『笈句題叢』は太策編、文政三年（一八二〇）・文政六年（一八二三）刊、ということになる。これら「類題集」を繙きつつ、子規たちは、蕪村の「非凡」を発見したというのである。その結果、子規たちの関心は、『蕪村句集』にと向つたのである。

『蕪村句集』は、几董編、天明四年（一七八四）刊。この句集、今日においては、比較的多くの国・公・私立大学図書館等に蔵されており、容易に披見可能であるが、子規の時代には、なかなか披見できなかったようである。その辺のいきさつについては、大正五年（一九一六）六月刊、内藤鳴雪著『俳句のちかみち』（広文堂書店刊）中のエッセイ「蕪村句集に就て」の中に詳しい。かいつまんで記してみる。

まずは、左の部分に注目していただきたい。子規、鳴雪、その他子規グループの人々が『蕪村句集』に夢中に

なる、そのきっかけが記されている。

記憶に探ると足掛け十五年の昔、即ち明治二十六年の頃、僕は子規居士の尻に付て俳句の味を嘗め初めたのが因果で、暁けても俳句、暮れても俳句、飲喰ふ時も、糞ひる時も、俳句くくで持切つて居たものだが、折節、椎の友会と云ふが出来て居て、連中は伊藤松宇、石井得中、石山桂山、片山桃雨、森猿男の五氏と云ふ宗匠臭くない顔触れであつたので、或る機会から子規居士と僕もそれに加はることになつた。

鳴雪も、子規と同様、明治二十六年（一八九三）という時点で『蕪村句集』との出会いを求めている。その場が伊藤松宇を中心とする「椎の友会」（角川『俳文学大辞典』は「椎の友社」として立項しているが、松宇生前に刊行されている『松宇家集』巻末の「松宇年譜」には「俳諧椎の友を結社し」「正岡子規椎の友に加盟す」とある。その呼称については、微妙）であつたことも明らかにされている。ちなみに、子規たちが、今日の句会にも通う独特の運座の方法を学んだのも「椎の友会」であつた。鳴雪は、『俳句のちかみち』中の「吾々の俳句会の変遷」なるエッセイの中で、その方法を、

宗匠を立てず、座中の人々が互いに選ぶといふことが、此の椎の友会の始めた事であつた。こゝが即ち

新派とだん／＼呼ばるゝやうになつた一つの理由である。して見ると宗匠の特権を会員平等に分権したのは確かに椎の友会が創意であつて、そして伊藤松宇氏が主唱したのであるから、此の事は、吾々の俳句会の歴史に於て特筆すべき事であると思ふ。と記している。

そこで、『蕪村句集』にもどる。子規、鳴雪参加の明治二十六年（一八九三）某日の「椎の友会」である。鳴雪は、次のように記している。

或る日蕪村の句が提出さるゝに至て、不思議にも衆口一致して実に甘い、と云ふことに歸した。けれども其時蕪村の句として知られたのは俳諧題叢等一、二の類集本にある丈で、此の他にもまだく佳句が如何に多からうと想へば想ふ程、蕪村句集が見たくなつて来た。

この後、子規たちは、いくつかの『蕪村句集』を披見することになるが、最終的には、一年半後、鳴雪自身が「芝の日蔭町の古書画商村幸」から上下揃いの板本を「貳円」（明治二十七年の公務員の初任給が五十円。『値段史年表』参照）で入手し、子規をはじめとする子規グループの人々の披見に供したのであった。

以上見てきた子規の『俳人蕪村』中の記述にしても、鳴雪の『俳句のちかみち』中の記述にしても、子規たち

が蕪村に関心を持つようになつたきっかけは、「椎の友会」における「余等」の「衆口一致」によつての歸結、といった印象が強い。そして、それは、明治二十六年（一八九三）の某月某日のことであると。ところが、最初に蕪村に関心を持ったのは、子規だったのである。そして、その時点は、一年遡つての明治二十五年（一八九二）のことである。

それを明らかにしているのが、明治二十五年（一八九二）十月九日付伊藤松宇宛子規書簡である。この書簡は、二人がまだ対面する前、松宇が、子規に自句「富士百首」（「首」は「句」に同じ。富士山の句、百句である）の批評を乞うたことにより認められたもの。この時、松宇は数え年三十四歳、子規は二十六歳。子規は、八歳年長の松宇に対して、礼を尽しながらも、一句一句に対して忌憚のない感想を述べている。その部分は、今、直接関係がないので省略し、書簡末尾に付されている追伸部分に該当する記述中の左の一節に注目してみたい。

万々御承知には候べけれども、蓼太、蕪村、闌更、暁台等の句集を御読被遊候上、此人等の奇抜勁健なる分子を御加味被成候はゞ、一段の光輝を相添へ可申と存候。

蓼太、蕪村、闌更、暁台には、それぞれ吐月編『蓼太句集』（明和六年刊）、几董編『蕪村句集』（天明四年刊）、車

蓋編『半化坊発句集』（天明七年刊）、臥央編『曉台句集』

（文化六年刊）が備っている。また、これとは別に、蓼太、闌更、曉台の発句を集めた車蓋編『発句三傑集』（寛政六年刊）もある。子規は、明治二十四年（一八九一）頃より「俳句分類」の仕事に着手している。その作業の中で、如上の人々の句集を披見した可能性は、十分にある。ただし、上に見てきたように、この時点で『蕪村句集』は披見していないのである。蕪村句に関心を持ったとしたら『俳人蕪村』の「緒言」で子規自身が述べていたように「類題集」によって、ということだったと思われる。それを松字に「句集を御読被遊候上」と記しているのは、うっかり筆がすべったということであつたようだ（後述の松字のエッセイ参照）。ただし『子規文庫蔵書目録』の中には、天保四年（一八三三）刊、乙二述、梅窓布席筆録『蕪村発句解』（『蕪村句集』から難解な典故を持つ七十三句に解説を加えたもの）の書名が見えるので、この書が念頭にあつての記述だったかもしれない。子規が明治二十五年（一八九二）という時点ですでに蕪村に関心を持っていた、というこの紛れもない事実には、右の書簡を受け取った松字自らも大いに注目している。先の『松字家集』に収められているエッセイ「正岡子規氏」の中で次のように述べている。

私が氏と訂盟した（筆者注・約束を結んだ）初めは、

私の富士百首の句を評せし言葉に、蕪村句集を見よと云ふた。逢ふた後に蕪村句集の事に言及したら、まだ自分も見ぬと云ふた。実際蕪村句集を懸賞で手に入れて各自が写し取^とつたのは明治廿六年の春頃で、其時の賞を得たのは友人片山桃雨氏で、其懸賞品を贈るの文章が今尚残^そて居る。

鳴雪の先のエッセイによれば、片山桃雨が賞を得た『蕪村句集』は、大野洒竹が古書店より掘り出してきた句数の少ない写本であつた由。それはともかく、松字も子規が最初の書簡で、蕪村、および『蕪村句集』に言及していたことは、しっかりと記憶していたのである。それだけ先見性に満ちた衝動的な指摘であつたということであろう。

子規自身は（鳴雪も）、「椎の友会」の討議の中で、期せずして蕪村への関心が高まつたように記しているが、右に見たように、一番最初に蕪村に注目したのは、実は、子規その人だったのである。

そんな子規であつてみれば、明治二十九年（一八九六）というはやい時点での三森松江編、春秋庵幹雄評点の『蕪村句文集』は、歓迎してもよいように思われるが、「固^{もと}より三文の価値を有せず。宜^{よろ}しく抹殺すべし」と、激しく怒り狂っているのである。この怒り方は、尋常ではない。そこでその『蕪村句文集』を緋^{ひもと}いてみることに

する。

二 『蕪村句文集』という本

『蕪村句文集』、竪一八・七センチ、横十二・四センチ、今のB6版よりやや小型。全百四十一ページ。奥付には、「明治二十九年（筆者注・一八九六）七月二十七日印刷、明治二十九年七月三十日発行、定価金三拾銭、編集者並発行者 東京市日本橋区蠣殻町二丁目四番地 平民 三森伊四郎、印刷者 東京市神田区旅籠町二丁目十一番地 多紀柳之助、印刷所 東京市神田区旅籠町二丁目十一番地 広業館、発行所 東京市日本橋区蠣殻町二丁目四番地 明倫社」とある。表紙には、右肩に「明倫叢書乙集」、中央に「春秋庵幹雄評点 蕪村句文集」、左下に「明倫社出版局」と印刷されている。

そして、開巻すぐに三森松江によって、明治二十八年（一八九五）七月の日付を有する「蕪村句文集序」が掲げられている。

三森松江とは、何者であろうか。大正十二年（一九二二）十二月刊、平林鳳二・大西一外著『新選俳諧年表』（書画珍本雑誌社）を繙くと、明治三十二年（己亥・一八九九）の項に左の記述が見える。

松江没、十二月三日、享年四十一、三森氏、称伊四郎、細鱗舎と号す、幹雄の養子、東京人。

これで明らかになつてくる部分がある。まず『蕪村句文集』の編集者並発行者である三森伊四郎は、三森松江のことだったのである。そして、表紙に見える評点者春秋庵幹雄の養子ということである。関根林吉著『三森幹雄評伝』（私家版、平成十四年七月刊）によれば、松江が幹雄の養子となつたのは、明治二十四年（一八九一）のことという。同書は、松江が書林播磨屋勝五郎の息子であることも伝えている。明治三十二年（一八九九）に数え年四十一歳で没しているので、生年は安政六年（一八五九）ということになる。子規より八歳年長である。手もとにある細鱗舎松江校閲、一事庵史葉編纂『俳諧発句名吟集』（弘文堂・尚古堂、明治二十七年三月刊）によつて松江の作品を何句か見ておくことにする（先の『三森幹雄評伝』によれば、史葉は、松江の兄の由）。

海も未だはるかに遠し初霞 松江

蝶飛ばばてふの海なり須磨の浦 松江

水引はかけねどゆゝし初松魚 松江

冷て猶香のいちじるし真桑瓜 松江

妻子ある姿は見えず角力取 松江

細くともひとりて立り男へし 松江

山茶花によい日当るや隣から 松江

やはり、全体的に知の勝つた作品であり、子規からは「月並」と一蹴されることになるう。

その松江が書いている『蕪村句文集』の序である。蕪村享受史の一つとしても注目すべき内容であり、その内容は子規の怒りの遠因（あるいは、要因かもしれない）となつていとも思われる。左に句読点、濁点、振り仮名等を付し、現行の漢字に改めて引用してみる。

嘗て聞く、有聲の画、無聲の詩と。祖翁、風雅は画の爲に学び、画は風雅の爲に学ぶと答へし許六をもほめ給ひぬ。されば、風雅と絵画とは月に影と光あるが如く、人に形と心あるが如く、和漢地を異にし、今昔年を隔つれども、其極る処一なり。誰か之を鑑みざらん。与謝蕪村は、蕉翁親灸の門人已に登天して、正風の命脈將に絶なんとする時にあたり、赫然正風を輝かせり。村、何故かくありしや。之を探るはいと味ある事ならずや。村はひとり風雅のみならず、其絵画真に逼り、妙に入て鬼神を泣かしむ。されば村が俳諧は絵画によりて成り、村が絵画は俳諧によりて成れりといふも諛言にはあらざるべし。村、実に風雅と絵画と両ながら得たればなり。村が卓越なるは此故にあらずんばあらず。近年、蕪村を崇拜するもの二種あり。一は其句体の奇な（る）を愛で、自蕪門と唱し、狂歌の囃言にひとしき句を吐く者とす。又一は其句の材料、漢語多く、調べの高きを活潑なりとして賞する者とす。両者ともに皮相にの

み感溺して、真相をしりしものにあらず。蕪村、若し世にありてかゝる崇拜を受なば何とかいはん。村が句、頗高調なりと雖、秋毫の末を描せり。村が語、奇なり雖も一言画ならざるはなく、画も亦氣運生動、おのづから声あるが如し。徒に句調を真似るものは狂人たるのみ。予は今、蕪村が句文集を印刷するにあたりて、家翁に評点を乞ふ。此評は、田福がいふ処の村が生涯を価するにはあらず。ひたすらに秀句の中の秀句を挙て示すにあり。而ていたづらに高調を弄ぶ輩、奇を好む門脈を一打し併て後進の指南事とせんと欲するのみ。見ん人、句を見ては絵画を思ひ、絵画を見ては俳諧を忘るゝ勿れ。

明治二十八年七月

三森松江

やや長くなつたが、内容はそれなりに充実している。少し、その内容を検討してみる。まず、冒頭の「嘗て聞く、有聲の画、無聲の詩」との部分である。「嘗て聞く」が、「有聲の画、無聲の詩」という言葉を、松江が耳から受け止めたものか、書物を通して受け止めたものか、この記述だけでは定かではない。「有聲の画」は詩、「無聲の詩」は、画のことである。松江が書物を通して受け止めたとすると、例えば、元禄十一年（一六九八）刊、許六の『篇突』には、左のごとく見える。

惣じて絵のうつらざる人は、風雅の上に欠たる事多

し。古人も、詩中の画、^⑤中の詩共いへり。又、詩は有声の画共かけり。

以下の芭蕉と許六の遣り取りの記述に注目するならば、許六の右の記述が、松江の念頭にあったと考えるのが自然のように思われる。「有声の画」については、黄潜の「苕溪風雨詩」に「為^レ君留^ム此^ニ有声ノ画。題^{シテ}作^ス三篇舟烟雨ノ図^ト」と、「無声の詩」については、黄庭堅の「次^三韻子瞻子由題^二憩寂図^一詩」に「李侯有句不^ニ肯吐^一淡墨写出無声詩」とあるという（『大漢和辞典』参照）。次に「祖翁、風雅は画の為に学び、画は風雅の為に学ぶと答へし許六をもほめ給ひぬ」の部分。これは芭蕉の俳文「許六離別詞」中の左の一節に拠っている。

其^{ものつはもの}器（筆者注・許六の器量）、画を好む。風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。画は何の^{なんにこのむ}為好や。風雅の^{なんにこのむ}為好といへり。風雅は何^{なんにこのむ}為愛すや。画の^{なんにこのむ}為愛といへり。其^{その}まなぶ事^{ふたつ}二にして、用をなす事^{いっ}一なり。

続く「和漢地を異に」する例として示されているのが漢詩に典拠を求めることができる「有声の画、無声の詩」の世界であり、「今昔年を隔」てた例として示されているのが、「許六離別詞」を踏まえての芭蕉と許六の問答の内容である。そして、この「風雅」と「絵画」の二つながらの实践者が蕪村というわけである。すなわち「村が俳

諧は絵画によりて成り、村が絵画は俳諧によりて成れり」というわけである（「誣言」は、事実をまげて言うこと）。ここに蕪村の「卓越」性、「赫然（きらきらと）正風を輝かせ」た要因があるとするのが、松江の考えである。この限りにおいては、間然するところはない。

が、松江の筆は、同時代人の蕪村評価の現状に及び、その記述が、子規を激怒させることになるのである。

先に見たように、松江編の『蕪村句文集』が出版されたのは、明治二十九年（一八九六）のこと。一方、子規は、はやく明治二十五年（一八九二）という時点において蕪村に、まずは単独で関心を示し、翌明治二十六年（一八九三）には、伊藤松宇を中心とする「椎の友会」のメンバーとともに蕪村に夢中になり、以後は、門人たちとともに蕪村一辺倒の日々を過していたのである。そんな子規を、明治二十八年（一八九五）五月十日発行の「帝國文学」の「雑報」欄では、

子規は純然たる蕪村派なり。

と評し、

蕪村の奇才は、何人も否定する能はざる処也。其措辞の妙、落想の奇、吾人（筆者注・「雑報」執筆者。佐々醒雪か）をして一誦三嘆せしむ者固り乏しからざる也。（中略）吾人は、かの蕪村の崇拜と模倣とが、単に芭蕉に到達するの一階梯たることを切望する者

なり也。

との見解を示しているのである。そんな風潮を睨みながら、松江は、左のごとく記したのである。重複を厭わず、その部分を再度、そのまま引き写してみる。

近年、蕪村を崇拜するもの二種あり。一は其句体の奇な（る）を愛で、自蕪門と唱し、狂歌の嚆言（たわごと）にひとしき句を吐く者とす。又一は其句の材料、漢語多く、調べの高きを活潑なりとして賞する者とす。兩者ともに皮相にのみ惑溺して、真相をしりしものにあらず。

この松江の記述は、明らかに、「蕪村派」と評せられた子規グループを意識しているよう。松江は、蕪村崇拜者として「二種」を指摘しているが、子規グループは、どちらかというと前者、すなわち「自蕪門と唱」する人々の範疇に入れられているように思われる。なぜならば、少しく後になるが、子規が明治三十年（一八九七）四月十三日より十一月二十九日まで十九回にわたつて新聞「日本」あるいは新聞「日本付録週報」に連載した評論「俳人蕪村」の「緒言」において、

多くの人は、蕪村が漢語を用うるを以て其唯一の特色となし、しかも其唯一の特色が何故に尊ぶべきかを知らず。況んや漢語以外に幾多の特色あることを知る者殆んど之れ無きに至りては、彼等が蕪村を尊

ぶ所以を解するに苦むなり。

と記しているからである。

後代、河東碧梧桐は、その著『子規の回想』（昭南書房、昭和十九年六月刊）の中で、当時の「日本」派内の俳句の状況を、

蕪村調といふものが、どんなものであるかも十分研めず、単に其の形骸の模倣に努め、「新花摘」によつて示された一題十句を、句作の最善の方法だと心得たりして、半ば浮かれ調子であつた当事の我々は、言はゞ傍若無人でもあつたが、其の余勢に生れた虚子を先陣としての我々の新調、又た乱調なるものは、とりも直さず、我々の当時の雑煩的心境を反映したものであつた。我々の不平不安、心の焦燥、どうともなれ構ふもんかと言つた捨鉢的な気分の濃厚な雰囲気蕪村の魂が乗り移つた、そんな気のする新調であり、乱調であつた。

と回想している。そして、当時の蕪村にかかわつての子規の思いを、

子規には、夢寐にも忘れ得ない明治俳句の、元禄天明と異なる特色樹立の問題があつた。芭蕉を祖述し、蕪村を模倣して、それで何も残らないような俳壇を恥辱と考へてゐた。百年千年の後から見て、元禄天明にまさる明治俳壇でなければ我々一党の生き甲斐

はないと思つてゐた。

と付度している。碧梧桐のこの推測は、十分に首肯し得るものであらう。それゆえに、先の松江の子規を含めての蕪村崇拜者に対する「皮相のみに惑溺して、真相をしりしものにあらず」との発言は、看過できない、許しがたいものだったはずである。

そんな子規の怒りを無視するがごとく、松江は、さらに左のごとく記しているのである。

予は今、蕪村が句文集を印刷するにあたりて、家翁に評点を乞ふ。此評は、田福がいふ処の村が生涯を価するにあらず。ひたすらに秀句の中の秀句を挙て示すにあり。而てい^{しかうし}だづらに高調を弄ぶ輩、奇を好む門脈を一打し、併て後進の指南車とせんと欲するのみ。

まさに、子規の神経を意識的に逆撫でするような発言である。右の文中に見える「田福」は、蕪村門の俳人。京の呉服商。寛政五年（一七九三）没、享年七十三。『蕪村句集』の跋文を書いている。その跋文の中に、

句集を世に弘うすることは、あなかしこ、翁の本意にはあらず。全く是をもて此翁を議すべからずといふ事を、田福しるす。

との文言が見える。松江が「此評は、田福がいふ処の村が生涯を価するにあらず」と言っているのはこの田福

の跋文中の発言を意識してのものである。田福が、一冊の句集によつて蕪村を評価できないと言っているように、「家翁の評点」によつて蕪村を評価しようなどという不遜な考えは、さらさらないと言うのである。ただ「秀句中の秀句」を示し、「高調を弄ぶ輩、奇を好む門脈」（子規グループのことである）を打破し、後進への指針（「指南車」とするのが目的であると言っている）。

松江言うところの「家翁」とは、言うまでもなく松江の義父、春秋庵三森幹雄のことである。幹雄は、文政十二年（一八二九）の生まれ。子規より三十八歳年長。明治四十三年（一九一〇）没、享年八十二。俳諧教導職に補された経歴を有する幹雄は、旧派俳諧の權威の象徴的存在。先の関根林吉著『三森幹雄評伝』に詳しい。子規と幹雄は、面識がある。二人がはじめて会つたのは、明治二十六年（一八九三）七月三日のこと。子規の「癩祭書屋日記」の「明治二十六癸巳年」の条に、

七月三日

仙湖来。出社。林和一氏紹介幹雄、青宜二氏於倉田屋。

風涼し髭なきは我一人哉

と見えることによつて、それを知り得る。仙湖は、菊池謙二郎。水戸の人。教育者。水戸学者。子規と同年。第一高等中学校時代、親交を結んだ。林和一は、号江左。

江戸の人。明治二十九年（一八九六）没、享年五十九。

幕臣、衆議院議員。青宜は、島本氏。江戸の人。明治三十年（一八九七）没、享年七十九（以上、大塚毅著『大正明治俳句史年表大事典』による）。要は、林江左によつて旧派宗匠春秋庵三森幹雄、島本青宜を紹介されたというのである。

江左林和一については、明治二十九年（一八九六）八月二十七日付で新聞「日本」に掲載の随筆「松蘿玉液」の中で、その訃を報じつつ（六月二十七日没）、

氏、俳諧に於て自ら得たりと為すあるに拘らず、一方に於て多少吾を推奨するの意あるが如し。深く其の知己の恩に感ず。

と記し、また、

前年（筆者注・明治二十六年）、吾が奥羽行脚を思ひ立つや、氏は吾が為めに二、三の宗匠を紹介し、且つ行李用の泥研一個をはなむけとして贈らる。今は行脚も昔の夢に残りて、身は一室の内を出づる能はず。そゞろ感に堪へず。

と記して、偲んでいる。「二、三の宗匠」の中の一人が、右に見た三森幹雄だったというわけである。が、幹雄の紹介状を持参しての奥羽各地の宗匠訪問は、完全に期待外れ。明治二十六年（一八九三）七月二十一日付の旅行先岩代（福島県）からの碧梧桐宛の書簡には、次のよう

に記されている。

小生、此度の旅行は、地方俳諧師の内を尋ねて旅路のうさをはらす覚悟にて、東京宗匠（筆者注・幹雄）之紹介を受け、已に今日迄に二人おとづれ候へども、^{まこと}以て恐入つたる次第にて、何とも申様なく、前途茫々、最早宗匠訪問をやめんかとも存候程に御座候。俳諧の話しても到底聞き分ける事も出来ぬ故、つまり何の話もなく、ありふれた新聞咄、どこにても同じ事らしく、其癖小生の年若きを見て大に軽蔑し、ある人は、是非幹雄門へはいれと申候故、少々不平に存候処、他の如は頭から取りあはぬ様子も相見え申候。まだ此後どんなやつにあふかもしれずと、恐怖之至に候。此熱いの御行儀に座りて頭ばかり下げてゐなければならぬといふも、面白からぬ事に候。子規の旧派宗匠に対する落胆ぶりの大きさが十分に窺知し得る。子規は、すでに前年、明治二十五年（一八九二）六月二十六日より十月二十日まで、新聞「日本」に三十八回にわたつて「癡祭書屋俳話」を連載、俳句革新に乗り出していたのである。が、地方の宗匠は、そんなことには全く関心がなかつたようである。それゆえ、中央俳壇を震撼させている新進気鋭の俳人子規の名前（存在）など、彼等の念頭には全くなく、話といえば世間話（「新聞咄」）だけ。書生風情ということで、大いに見く

びられたのである。宗匠から「是非幹雄門へはいれ」などと言われることは、子規にとつては、言いようもない屈辱だったのであらう。そんな無知蒙昧な宗匠の頂点に立っていたのが幹雄だったということなのである。

子規にとつて、そんな幹雄が「評点」を付している『蕪村句文集』の存在など考えられなかったのである。

しかも表紙には、編者三森松江の名前はどこにも記されていないが、「春秋庵幹雄評点」と大書されているのである。

子規が、エッセイ「墨のあまり」で「明倫社にて出版したる蕪村句文集には幹雄の圈点あり。彼は多く蕪村集の拙き側の句を取りて之を賞揚したる者、固より三文の価値を有せず。宜しく抹殺すべし」と怒りをぶちまけているのも理解し得ようというものである。子規にとつて、

蕪村は、あくまでも彼等「蕪村派」が発掘した俳人なのである。無知蒙昧な旧派宗匠などに蹂躪されたくない、この思いは、「宜しく抹殺すべし」との過激な言を吐かせるまでに強かったのである。そこで、いよいよ幹雄の「評点」を見てみたいと思うが、その前に「序」の次に示されている「例言」（凡例）にも目を通しておくことにしたい。

例言

一 発句の評点は、◎点を以て最も重する処とす。

一 発句搜索の便を図り、龍頭（筆者注・上欄）に季

詞を載す。之が為に句を前後せしめしものあり。又、一題二処に出たるもあり。詠物の累りたるもの、及宵の春、春の宿の比ひは之を朗詠として載す。

一文集の原集には自筆を其儘のせたるものあれど、此には活字に換ふ。

一文集の末に拾遺とせしは、原集にあるにあらず。自筆を聞たるが故に載する処なり。

一 校正は務て綿密にせしむる者なれば、魚魯（筆者注・文字の誤）衍脱（筆者注・不要な文字、足りない文字）なきを保し難し。訂を給へば幸甚。

松江識

右の「例言」の中で、第一項は、次章で触れる。第二項を見ると、『蕪村句文集』が、『蕪村句集』『蕪村翁文集』の忠実な活字化（翻刻）ではなく、かなり恣意的に手が加えられていることがわかる。また、活字化の姿勢も、すこぶる恣意的、かつ杜撰であり、逸速い活字化は評価されるものの、テキストとしては、使用に堪えない。例えば、これから検討を加えることになる『蕪村句集』について、その一端を見てみると、板本の冒頭句をそのまま活字化するならば、

ほうらいの山まつりせむ老の春

となるところが、

蓬萊の山まつ、せん老の春

と活字化されている、といった具合である。三句目の、

三椀の雑煮かゆるや長者ふり

は、

三椀の雑煮かふるや長者ふり

と活字化されている。わかりやすいテキストを提供しようとの姿勢は、わからなくてもないが、活字化（翻刻）の姿勢としては首肯し難い。全体、この種の活字化で満ちていることを報告するに止め、これ以上例示することは控える。ちなみに、博文館の俳諧文庫の一冊として大野洒竹校訂『蕪村晩台全集』が出版されたのは、明治三十一年（一八九八）十二月。中で『蕪村句集』も活字化されているが、活字化の姿勢は、いたって厳密である。子規は、明治三十一年（一八九八）六月発行の「ほととぎす」第十八号に載せた俳論「或問」の末尾に、

古俳書は坊間に乏しく到底之を求むる能はず。活字本は珍本を集めて値段の安き者多し。俳書を求めんと欲する人は、活字を求むるに如かず。但し活字本には無数の誤字あることを承知し置くを要す。

（傍点筆者）

と記し、杜撰な校訂の活字本の活用に対して警告を発している。『蕪村句文集』など、その最たるものであろう。

第五項目を記している松江も、そのことは承知していたようではあるが。

三 「春秋庵幹雄評点」考

松江が「序」において「印刷するにあたりて家翁に評点を乞ふ」と記し、「例言」の第一項で「発句の評点は、◎点を以て最も重する処とす」と記しているところの『蕪村句集』に付した春秋庵三森幹雄の「評点」に注目してみる。子規が「彼は多く蕪村集の拙き側の句を取りて之を賞揚したる者、固より三文の価値を有せず。宜しく抹殺すべし」との言によって唾棄した幹雄の「評点」である。

そこで、子規が、幹雄は「蕪村集の拙き側の句」を誤って評価している、と断言している、そのことを検証するために、子規を中心とする子規グループの人々によって試みられた明治三十一年（一八九八）一月十五日よりの「蕪村句集論講」を参照してみることにしたい。この論講は、子規没後の明治三十六年（一九〇三）四月六日まで六十三回続けられ、『蕪村句集』は読了されたのである。今、便宜的に明治三十三年（一九〇〇）三月に単行本『蕪村句集講義 冬之部』（俳書堂）として出版されたものを用い、「冬之部」のみに絞って、子規の言を検証してみることにする。

まず、『蕪村句文集』中の『蕪村句集』の「冬の部」において、幹雄が◎の「評点」を付した作品、すなわち「最も重する処」の作品を左に列挙してみる。句形は、『蕪村句文集』のままに引用する。便宜的に通し番号を付す。

- 1 簑虫の得たりかしこし初時雨
- 2 楠の根を静かにぬらす時雨哉
- 3 夕時雨暮ひそみ音に愁ふかな

(前書省略)

- 4 爐に焼てけぶりを握る紅葉哉

(前書省略)

- 5 嵐雪とふとん引あふ佗寐かな
- 6 虎の尾をふみつゝ裾に布団哉

(前書省略)

- 7 簑笠の衣鉢つたへて時雨かな
- 8 批ひ把ひの花鳥もすさめず日暮たり
- 9 磯千鳥足をぬらして遊びけり
- 10 打よする波や千鳥の横あるき
- 11 水鳥や舟に菜を洗ふ女有

老女の火を吹き居る画に

- 12 小野の炭匂ふ火桶のあなめ哉
- 13 埋火も終には煮る鍋のもの
- 14 沙弥律師ころりくゝと衾かな

(前書省略)

- 15 もしほ草柿のもと成落葉さへ

(前書省略)

- 16 木枯に腮ふかるゝや鉤の魚
- 17 こがらしや鐘に小石を吹当る
- 18 いざ雪見かんちつくり容かたちす簑と笠
- 19 雪をれや吉野の夢のさめる時
- 20 宿かさぬ火影や雪の家つゞき

(前書省略)

- 21 牙寒き梁の月のねづみ哉
- 22 老を山へ捨し世も有に紙子哉
- 23 皿を踏む鼠のおとのさぶさ哉
- 24 斧入て香におどろくや冬木立
- 25 木のはしの坊主のはしや鉢叩
- 26 西念は最う寐た里を鉢たゝき
- 27 御火焼や犬も中々そぞろ兒
- 28 足袋はいて寐る夜物憂夢見哉
- 29 かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥
- 30 我のみの柴折くべる蕎麦湯哉
- 31 山水の減るほど減りて水かな
- 32 寒月やかれ木の中の竹三竿
- 33 細道になり行く声やかん念仏
- 34 妻や子の寝顔も見えず葉ぐひ

35 客僧のたぬき寐入やくすり喰

春泥舎に遊びて

36 霊運も今宵はゆるせ年わすれ

37 鶯のなくや師走の羅生門

以上、「冬の部」全百九十四句中の三十七句である。○印の「評点」を付した作品は、八時雨るゝや鼠のわたる琴の上√より八芭蕉去て其後いまた年暮す√に至るまで、全九十二句あるが、今は、その検討を省略する。

そこで『蕪村句集講義 冬之部』を繙いてみる。

すでに記したところであるが、『蕪村句集講義』（蕪村句集輪講）の「冬之部」の第一回目が、根岸の子規庵でスタートしたのは、明治三十一年（一八九八）一月十五日のこと。三森松江編、春秋庵幹雄評点の『蕪村句文集』が出版されたのは、明治二十九年（一八九六）七月三十日。『蕪村句集』の輪講に参加した子規、および子規グループの人々は、当然のことながら『蕪村句文集』を披見し得たのであり（子規が比較的すぐ反応を示したことについては、小稿冒頭に紹介したエッセイ「墨のあまり」の一節で確認いただきたい）、話題にもしたことでもある。輪講参加者たちは、幹雄の「評点」にも目配りしつつ読み進めていったことであろう。そのことは、念頭に入れておく必要がある。

またあくまでも『蕪村句集』の輪講であるので、言う

までもないことであるが、子規が総ての蕪村句に対して発言しているわけではない。そして、一回ごとに記録者がいることも、一般的な輪講と変えることはない。「冬之部」は、全十四回にわたって輪講が試みられている。それぞれの記録者は、一回目（明治三十一年一月十五日）が碧梧桐、二回目（同年二月五日）が子規、三回目（同年三月五日）が虚子、四回目（同年四月五日）が碧梧桐、五回目（同年五月五日）が露月、六回目（同年六月五日）、七回目（同年七月五日）、八回目（同年八月五日）、九回目（同年九月五日）、十回目（同年十月五日）が子規、十一回目（同年十一月五日）、十二回目（同年十二月五日）、十三回目（明治三十二年一月五日）、十四回目（同年二月七日）が虚子である。輪講の行われた場所は、いずれも根岸の子規庵である。

そこで、いよいよ子規の発言に注目してみることにするが、大前提として、子規の蕪村に対する評価として「千首の俳句盡く巧」（『俳人蕪村』）ということがあったというのである。蕪村の作品に悪句、駄句を認めようというのである。それゆえ、幹雄の「評点」に対して「彼は多く蕪村集の拙き側の句を取りて之を賞揚したる者、固より三文の価値を有せず」と批判しているのは、実は矛盾なのである。子規にとつて、蕪村の作品中には、本来「拙き側の句」は、存在しないはずだからである。

が、幹雄の「評点」に、敢えて異を唱えたい思いが強かったであろう。なぜならば、「月並」旧派宗匠俳人に蕪村の素晴らしさが理解し得るはずがない、との思いが強かったであろうからである。

それでは、子規は幹雄が「最も重する処」と評価した三十七句の中で、どの句を「拙き側の句」としているのであろうか。興味津々たるものがある。ただし、先にも述べたように、あくまでも輪講形式なので、三十七句すべてに対して子規が発言しているわけではない。

掲出順に見ていくことにする。子規が負の評価を与えている蕪村句である。

8 枇杷の花鳥もすさめず日くれたり

輪講第二回目の中の句で、記録者は、子規自身である。

子規曰、余思ふ。此句さしたる趣向も無く、寧ろ蕪村の平凡なる者なり。只此句を捨てざるは、句の曲無き処が枇杷の花の曲無き処と相副ふがためなり。

「蕪村の平凡なる者」との言は、一応、負の評価と見做してよいであろう。ただし、全否定はしていない。「すさめず」は、思うままに愛さずの意。『蕪村句文集』の

「枇杷」は、活字化（翻字）の誤り。

9 磯ちどり足をぬらして遊びけり

輪講第三回目の中の句で、記録者は、虚子。

子規つけていふ。千鳥は鷗なりといふ古説あり。又、

現今、千鳥と称ふる一種の鳥ありと。然れども、今千鳥といへる鳥が昔よりいひ来れる千鳥には非るべしと思ふ。去来（筆者注：去来句へあら磯やはしり馴たる友衛を指している）、蕪村などの千鳥の句も実物を知りて作れるにはあらず。善い加減の空想なるべし。

子規は「実際の有のまゝを写す」ところの「写真」「写生」を重視した（明治三十三年稿「叙事文」参照）。「千鳥」に対しても、右のように厳密であろうと努めている。そして、蕪村句に対して「善い加減の空想」と断じている。これは明らかに負の評価。『蕪村句文集』の「磯千鳥」の表記は、恣意的に改めたもの。

老女の火をふき居る画に

12 小野の炭匂ふ火桶のあなめかな

輪講第四回目の中の句で、記録者は、碧梧桐。

子規いふ。何だか面白からぬ句なり。

これだけであるが、評価の点からは、負と見做してよいであろう。子規のこの評価に対して、内藤鳴雪は「子規君、面白からぬと云はるゝは、例の滑稽嫌の故なり」と反論している。ただし、鳴雪の発言は、自らの滑稽観との比較においてであり、子規が俳句における「滑稽」を全面的に否定していたわけではない（詳しくは拙著『子規との対話』所収の「子規の滑稽観の確認」を参照

されたい。『蕪村句文集』の活字化は、この句についても前書、作品ともに恣意的。

隋葉を拾ひて紙に換たるものこの貧しき人も、腹中の書には富るなるべし。さればやまとうたのしげきことのほのうち散たるをかきあつめて捨ざるは、我はいかひの道なるべし。

15 もしほ草柿のもと成落葉さへ

輪講第六回目の中の句で、記録者は、子規自身。したがって、草稿においても子規の見解が披瀝されている。

(前略) 此一句の意味は、和歌の詞も、和歌に用ゐぬ詞も、何も彼も掻き集めて俳諧には用うるなりとでもいふ事なるべけれど、別に深い意味があるので無く、只縁語の展覧会見たやうなもので、甚だ面白からず思ふ。(中略) 成程「もしほ草柿の本なる落

葉さへ」といふ句は、つまらぬことはつまらぬけれど、併し其無頓着なる処には、どうやら少し蕪村らしい処もあつて、宗匠などに出来る句では無い。それ故、此句は存するとしても善いが、何分にも厭味たらしく、勘弁ならぬのは此端書をくつゝけた処である。何とか今少し書きやうもあつたらうに。もつとも蕪村はこんな句を善いと思ふたのでは無く、只ちよつと草稿の端に書きつけてあつたのを几童が抜き出したので、几童は、無暗に端書と屁理屈の好き

な男である。几童に尤いやな処はこゝである。

前書(端書)とのかかわりで、引用が長くなつてしまつた。が子規が、一句に対してはつきりと負の評価を下していることは「甚だ面白からず思ふ」との言で明らかであらう。それに加えて、子規は、一句の前書(端書)に対しても、厳しく糾弾している。「厭味たらしく勘弁ならぬ」とまで記している。が、その責任は、『蕪村句集』の編者である几童にあると断定している(清水孝之氏は、その著『與謝蕪村集』(新潮社版)において、『蕪村句集』は、蕪村の自撰と編集に成るもの、との説を示されているが、今日に至るまで、通説では几童の編集と見做されている)。「蕪村派」子規にあつては、可能な限り蕪村を擁護しようということであつたと思われる。

19 雪折やよし野の夢のさめる時

輪講第八回目の中の句で、記録者は、子規自身。全文引用してみる。

吉野の花見の夢を見て居たのが、目がさめた時に恰も木の雪に折れた音が聞えたといふ趣向である。雪は花に似て居るといふ処から、雪の降る夜の夢に、其連想で吉野の花を見て居たが、覚めて見たらば、雪が深く積つたか、雪折が聞えたといふやうな極めて工夫の多い趣向である。無造作にいふた、だけ厭味は無いけれど、元來趣向は蓼太的の者で、あぶない

趣向ぢや。

「あぶない趣向」は、負の評価と見てよいであろう。鳴雪は、この子規評に対して「子規子あぶないの評、妙々」と賛意を表している。『蕪村句文集』の表記は、すこぶる恣意的。

故人暁台、余が寒炉を訪はずして帰郷す。知是東山西野に吟行して往焉として晦朔の代謝をしらず、帰期のせまりたるをいかんともせざる成べし。

21 牙寒き梁の月の鼠かな

輪講第九回目の中の句で、記録者は、子規自身。この句の前書（端書）に負の評価を下したのは、鳴雪。まず「此端書は、実に拙い端書です」と述べ、「発句は誠に此上も無いうまいが、文章は上手でなかったと見える」との見解を示している。そして、前書の典拠について左のごとく記している。

漢書の方の出所を二つ考へ出しました。一つは杜甫の五言古詩に夢李白といふがある。其内に落月満屋梁、猶疑見顔色といふ名高い句がある。その事で、梁の月といふは此句から出たのでせう。今一つは詩經にある詩で、相鼠有齒、人而無止、人而無止、不死何俟。相鼠有体、人而無礼、人而無礼、胡不遄死、とある。これから牙寒きといふたのではあるまいか。即ち暁台の礼の無い事を戯半分に譏つたのではあ

るまいか。

この鳴雪の発言を受けて、子規は、右の一句を次のように評している。

子規曰く、落月屋梁の事は気が付きませんでした。

梁に付いての私の解釈（筆者注・子規は先に「鼠は梁に住む者だから」との解釈を披瀝している）は取り消します。さうすると、これは梁の月といひかけ、それから月の鼠とひつかけたのですから、此句はつまらぬといふよりも、厭味が出来て来ました。従つて暁台を嘲る意などは無くなつて、只駄ジャレの句となりました。詩経の典故は引かん方が善いかと思はれます。

鳴雪から杜甫の詩「夢李白」の典拠を示された子規は、珍らしく「此句はつまらぬといふよりも、厭味が出来て来ました」と、今までにない酷評を加えている。

32 寒月や枯木の中の竹三竿

輪講第十三回目の中の句で、記録者は、虚子。

子規氏曰く、私は枯木の中の竹三竿は大変面白いが寒月はよけいなものを持て来たやうに思ひますが。

これに対して、鳴雪は、

鳴雪氏曰く、さやう枯木の中の竹三本でもすでに画になつてゐるが、寒月で隈々まで克く見えてゐるといふところにも趣があるぢやありませんか。枯木の

中に竹三竿といふ画も善いが、又寒月のも善いぢやありませんか。

との見解を示している。それに対して、子規は反論している。

子規氏曰く、私は寒月があるために景色が崩れると思ひます。天高しと同様ぢやと思ひます。

「天」でいいものを、わざわざ「天高し」と言うのと同様、一句における「寒月」は、贅言だというのである。部分的ではあるが、子規は、一句に負の評価を下しているのである。が、鳴雪が評価しているように、この句などは、評者によつて評価が變つてくる作品ではあろう。この句に関しても、『蕪村句文集』の表記は、恣意的である。

以上、幹雄が「最も重する処」と評価した三十七句の中の七句に対して、子規は負の評価を下しているのがあった。が、この結果をもつて、子規に「彼は多く蕪村集の拙き側の句を取りて之を賞揚したる者、固より三文の価値を有せず。宜しく抹殺すべし」との言を吐かせるほどに幹雄の選句眼がいい加減であるとは言えないのはなからうか。

そればかりか、幹雄が「最も重する処」と評価した作品の中で、左の二作品などは、子規も、また評価しているのである。

大魯が兵庫の隠栖を几童とゝもに訪ひて、人々と海辺を吟行しけるに。

16 風に鰓吹るゝや鉤の魚
輪講第七回目の中の句で、記録者は、子規自身。

鰓は「あご」、鉤は「かぎ」なるべし。魚をかぎに掛けて檐端などにつるしてある様と思はる。鰓吹かるゝといふにてつるしたる様見るが如し。巧なり。

清水孝之氏は、前掲の著書の中で「鰓」を『和名抄』に「阿木止。魚ノ鰓也」とあるのをもつて「あぎと」と訓んでおられ、首肯すべきかと思われるが、それはともかく、幹雄の評価と子規の評価は、一致しているのである。この句においても、活字化に當つての『蕪村句文集』の表記は、八木枯に鰓ふかるゝや鉤の魚と、すこぶる恣意的に改められている。原本の「風」を「木枯」と、「鰓」を「鰓」と翻字している。「鰓」は、「鰓」の俗字であり、意味は「あご」「おとがひ」。校訂者三森松江は、理解し得ていたのであるが、全体、恣意的に過ぎるとの非難は、免れないであろう。原本に厳密に翻字している子規たちから言わせれば、あまりに杜撰な翻刻姿勢ということになるかと思われる。

17 木枯や鐘に小石を吹あてて

輪講第八回目の中の句で、記録者は、子規自身（輪講を開かず）と見える。

小石といふのは、仰山なれど、砂の中に少し大きなのがまじりて居る位の事ぢや。つまり風が砂を吹きつけて釣鐘にあたるのでいくらか音が聞える程の烈しい勢を言ふたので、見つけた処が尋常で無い。

この子規の見解に対して、鳴雪も「此景は耳に聞くのみならず、目にも見るものと思はる。且釣鐘はおろして在るものとすれば趣最好し」と追加している。いずれにしても、この句においても幹雄と子規の評価は一致しているのである。ただし、『蕪村句文集』の活字化の態度は、この句においても、相変らず恣意的。

無論、中には、幹雄がまったく関心を示していない句、即ち無点句でありながら、子規が高く評価している句もあり、それなどを見ると、幹雄と子規の俳句観の違いが、かなり明瞭に浮び上ってくる。例えば、輪講第八回目（記録者子規）の中の左の句に対する子規の評価である。

こからしや何に世わたる家五軒

（前略）此句は、うまい句と思ふ。其うまい処は、

「何に世わたる」と中七字を据ゑた処にある。「風や……家五軒」といふは客観的景色で、中七字は作者の考である。斯ふいふ風に上下の客観の中に主観の七字を挿むことは蕪村の特色であつて、やがて天明時代の特色じや。明治の今日にも此句法が盛んに用ひらるゝが、元禄にはこれが無かつた者ぢや。

（中略）蕪村は好んで主観的形容詞を挿み（善き人、善き蚊帳の類）、又此句の如く主観的の形容句を中に挿むことを創めて大に都合善くしてくれた。

右の文言などは、蕪村独自の句法に対する最大級の評価であり、「蕪村派」子規の面目躍如とする評言と言つてよいであらう。

かくて、子規グループによるこの『蕪村句集』輪講は、明治三十六年（一九〇三）四月六日まで続けられ、完結するが（「冬之部」以下、「春之部」「夏之部」「秋之部」の順）、子規が参加したのは、明治三十五年（一九〇二）九月十日、「秋之部」の途中までである。すなわち、死の九日前である。小稿では、「冬之部」に限つて幹雄が◎点を付した蕪村作品（最も重する処）の作品と、それらの作品に対する子規の評言とを比較検討してみたのであつたが、その範囲においては、『蕪村句文集』の幹雄評点に対する子規の言「彼は多く蕪村集の拙き側の句を取りて之を賞揚したる者、固より三文の価値を有せず。宜しく抹殺すべし」は、やや過激に過ぎるようにも思われた。が、この言は、『蕪村句文集』の編者三森松江による「蕪村句文集序」中の、明らかに子規グループを意識しての「皮相にのみ惑溺して、真相をしりしものにあらず。蕪村若し世にありてかゝる崇拜を受なば、何とかいはん」との、まことに挑発的な批判の言への反論、との意

味もあつてのことだつたと思われる。

もつとはつきり言つてしまえば、旧派の「月並」俳人たちに、自分たちが発掘した『蕪村句集』の、そして蕪村の真価がわかつてたまるか、というところが、子規の中にあつた、ということだつたのではなからうか。

〔注〕

「帝国文学」第五（明治二十八年五月十日発行）の「雑報」

欄中の「近時の俳壇」において、執筆者（佐々醒雪か）は、

「子規は純然たる蕪村派なり」とする一方、尾崎紅葉に対しても「其頗る蕪村調に傾きしを認むる者也」との位置付けをしている。この評言などが三森松江の念頭にあつての「二種」であらうか。